

**[A年] 聖霊降臨節第8主日(2021年7月11日)****【旧約聖書日課】 エレミヤ書7章1～7節**

1主からエレミヤに臨んだ言葉。

2主の神殿の門に立ち、この言葉をもって呼びかけよ。そして、言え。

「主を礼拝するために、神殿の門を入れて行くユダの人々よ、皆、主の言葉を聞け。3イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行いを正せ。そうすれば、わたしはお前たちをこの所に住ませる。4主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではない。5<sup>6</sup>この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。7そうすれば、わたしはお前たちを先祖に与えたこの地、この所に、とこしえからとこしえまで住ませる。」

**【使徒書日課】 使徒言行録19章13～20節**

13ところが、各地を巡り歩くユダヤ人の祈禱師たちの中にも、悪霊どもに取りつかれている人々に向かい、試みに、主イエスの名を唱えて、「パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる」と言う者があった。14ユダヤ人の祭司長スケワという者の七人の息子たちがこんなことをしていた。15悪霊は彼らに言い返した。「イエスのことは知っている。パウロのこともよく知っている。だが、いったいお前たちは何者だ。」16そして、悪霊に取りつかれている男が、この祈禱師たちに飛びかかって押しえつけ、ひどい目に遭わせたので、彼らは裸にされ、傷つけられて、その家から逃げ出した。17このことがエフェソに住むユダヤ人やギリシア人すべてに知れ渡ったので、人々は皆恐れを抱き、主イエスの名は大いにあがめられるようになった。18信仰に入った大勢の人が来て、自分たちの悪行をはっきり告白した。19また、魔術を行っていた多くの者も、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。その値段を見積もってみると、

銀貨五万枚にもなった。20このようにして、主の言葉はますます勢いよく広まり、力を増していった。

**【福音書日課】 マタイによる福音書7章15～29節**

15「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとってあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。16あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。17すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。18良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。19良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。20このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。」

21「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。22かの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか』と言うであろう。23そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ。』」

24「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。25雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。26わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。27雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」

28イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。29彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

## エレミヤ書7章1～7節

1主からエレミヤに臨んだ言葉。2主の神殿の門に立ち、この言葉を叫べ。主を礼拝するためにこれらの門に入って行くすべてのユダの人々よ、主の言葉を聞け。3イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。あなたがたの道と行いを改めよ。そうすれば、私はあなたがたをこの場所に住ませる。4あなたがたは、「これは主の神殿、主の神殿、主の神殿だ」という偽りの言葉を信頼してはならない。5あなたがたが本当にあなたがたの道と行いを改め、本当に互いの間に公正を行うなら、6この場所で、寄留者、孤児、寡婦を虐げず、罪なき人の血を流さず、他の神々に従って自ら災いを招かないならば、7私はあなたがたをこの場所に、あなたがたの先祖に与えた地に、いにしえからとこしえまで住ませる。

## 使徒言行録19章13～20節

13ところが、各地を巡り歩くユダヤ人の祈禱師たちの中にも、悪霊に取りつかれている人々に向かい、試みに、主イエスの名を唱えて、「パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる」と言う者があった。14ユダヤ人の祭司長スケワと言う者の七人の息子たちがこんなことをしていた。15悪霊は彼らに言い返した。「イエスのことは知っているし、パウロのこともよく知っている。だが、一体お前たちは何者だ。」16そして、悪霊に取りつかれている男が、この祈禱師たちに飛びかかって押さえつけ、ひどい目に遭わせたので、彼らは裸にされ、傷つけられて、その家から逃げ出した。17このことがエフェソに住むユダヤ人やギリシア人すべてに知れ渡ったので、人々は皆恐れを抱き、主イエスの名を崇めるようになった。18信仰に入った大勢の人が来て、自分たちの悪行を告白し、打ち明けた。19また、魔術を行っていた多くの者も、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。

その値段を合計してみると、銀貨五万枚分にもなった。20このようにして、主の言葉はますます勢いよく広まり、力を増していった。

## マタイによる福音書7章15～29節

15「偽預言者に注意しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲な狼である。16あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。17すべて良い木は良い実を結び、悪い木〔直訳→腐った木〕は悪い実を結ぶ。18良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。19良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。20このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。』」

21「私に向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。天におられる私の父の御心を行う者が入るのである。22その日には、大勢の者が私に、『主よ、主よ、私たちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をたくさん行ったではありませんか』と言うであろう。23その時、私は彼らにこう宣告しよう。『あなたがたのことは全然知らない。不法を働く者ども、私から離れ去れ。』」

24「そこで、私のこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。25雨が降り、川が溢れ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。26私のこれらの言葉を聞いても行わない者は皆、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に似ている。27雨が降り、川が溢れ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れて、その倒れ方がひどかった。』」

28イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。29彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者のようにお教えになったからである。

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・7月11日「聖霊降臨節第8主日」の日課主題は「生活の刷新」。旧約日課は、「エレミヤ書」から神殿説教と呼ばれる箇所から。使徒書日課は、「使徒言行録」の伝えるパウロの三度目の宣教旅行の中で描かれるエフェソ伝道にまつわる逸話から。福音書日課は、「マタイ福音書」の「山上の説教」の終わりの箇所から。

**旧約日課(エレミヤ7章より)**

・「エレミヤ書」は、ユダヤ教正典中「後の預言者」の第二に置かれた預言書。預言者エレミヤは、南王国末期に中央集権的な改革を断行して大国に対峙しようとしたヨシヤ王のもとで改革の担い手となった祭司集団の一員(王宮預言者!)だったと考えられる人物で、ヨシヤ王亡き後(前609年ごろ)、王国滅亡(前587年ごろ)までの期間、非主流派王宮預言者として体制派と対峙する中で預言活動を続けた。「書記バルク」が行動を共にしてエレミヤの預言やその活動を記録したと考えられる(エレミヤ32章、36章、43章、45章)。「バルク」に関連する文書として、「旧約聖書続編」に「バルク書」が収められている。

・エレミヤは、ヨシヤ王時代に王宮預言者として体制内で活動を始めた人物で、その立場は終身、変わらなかったと考えられる。しかし、ヨシヤ王以降の王たちは、いずれもヨシヤ王の改革を継承せず、エレミヤは、王宮内で閑職に追いやりられ、事実上、王に対する発言の機会を奪われていたのだろう。エレミヤは神殿批判や祭儀批判を繰り返しているが、その意図は、神殿や祭儀などの意義を真っ向から否定することではなく、ヨシヤ王の改革で取り組まれた神殿・祭儀の改革が骨抜きにされていることに対する批判であったと考えられる。エレミヤらが担ったヨシヤ王の改革では、「預言者イザヤ」の時代の「ヒゼキヤ王」と預言者(イザヤ)との関係性を一つの模範とする「王宮」と「神殿」との関係性(王は、神の言葉を預言する神殿祭司を通して神の言葉に聞き従う)が目指されたと考えられるが、そこには、正統な神殿祭司として「律法」を伝承・継承する(「イザヤを範とする」預言者集団)が前提とされていた。28章には王宮体制派の預言者として「ハナンヤ」が登場するが、彼を「偽預言者」として糾弾するのは、彼が、そのような「預言者集団」に属さない者であったことが一つの大きな理由だったと推認される。

・日課箇所の7章は、「エレミヤの神殿説教」と呼ばれる。この神殿説教についての言及とさしているのが26:1以下の記述。ヨヤキム王(26:1)は、エジプト軍との戦闘で戦死したヨシヤ王の後継アハズ王が3か月でエジプト王によって退位させられ傀儡として即位させられた王(王下23:34)。エレミヤの預言では、「神殿」を単に自分たちを守護してくれる神を呼ぶ場としてではなく、「預言者」を通して「律法」を聞くところとして位置づける立場が強調されている。

**使徒書日課(使徒19章より)**

・「使徒言行録」は、16章以下でバルナバと別れたパウロの宣教団の動向を伝え描いている。日課箇所は、パウロ宣教団の二回目の宣教旅行の叙述の中に置かれているが、18章後半から20章にかけてエフェソ宣教全体の概要が物語られている。他の地域での宣教活動の叙述とは明らかに異なっており、「ルカ・使徒言行録」や「パウロ書簡集」を生み出した集団とエフェソ教会が極めて近い関係にあったことが推認される。日課箇所も、エフェソ伝道にまつわる逸話であるが、パウロが直接登場するわけではなく、「パウロの宣教活動」によってもたらされた影響力の大きさを(少し誇大に)物語るものとなっている。

・13節「祈禱師(エクソルキステース)は、悪霊祓いを行う「祓魔師(エクソシスト)」のこと。ユダヤ人社会でどのような立ち位置であったのかは不明であるが、福音書には「ファリサイ派の仲間」にも同様の行為を行っている者があることを主イエスが指摘している箇所があるし(マタイ12:27など)、主イエスと弟子たちも同様の行為を行っている(マタイ10:1など)。どのような力や権威、原理によって悪霊祓いをするかは、(おそらくそれぞれの秘術秘伝であるゆえに)具体的には知られていないが、福音書の伝える主イエスの言及や日課箇所の描写によれば、悪霊に勝る力を有した存在の名を宣言し、その力を呼び出すことによって、悪霊を排斥できると考えられていたようである。しかし、ここでは、そのような「名の宣言」が効力を発揮しなかったばかりか、対峙した悪霊に祈禱師たちの実力(無力)を見透かされ、逆襲に遭ってしまったと、コミカルに描かれている。「使徒言行録」は、弟子たちが同じような力を発揮するための力の源泉として「聖霊」を考慮しており、前段(19:1~10)でも、「主イエスの名による洗礼」を授けられることによって起こる「聖霊降臨」を弟子に必須の事柄として描いている。

・18節「来て、自分たちの悪行をはっきり告白した」=(直訳)「来て同意し(エクソモルゲオー←エクス+ホモロゲオー)、自分たちの行い(プラクセイス)を告げた(アナングロー←アナ+アングロー)」。

・19節「魔術を行っていた者」=(直訳)「過剰行動(ペリエルゴス)を行っている(プラツソー)者」。「書物(ビブロス)」

**福音書日課(マタイ7章より)**

・日課箇所は、「山上の説教」の終結部。前段7章前半とともに「終結部」を構成しており、5:17~20で「律法と預言者」=「聖書」に対する態度が示されていたことに対応する枠を形成している。15節「偽預言者」、21節「わたしに向かって、『主よ、主よ』という者」、26節「わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者」などは、5:20「あなたがたの義」にそぐわない人々、特に「律法学者やファリサイ派の人々」を示唆するものとして置かれている。

・すでに 7:13 で「(あなたが)してもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」というまとめ句が提示されていた。日課箇所は、「律法と預言者」=「聖書」を知っていても、そこから聞き取った「天の父の御心」を行う者と行わない者があるという、御言葉に対する人の態度のあり様を明らかにしながら、「イエスに従う弟子」としての態度がどちらであるべきかということをあらためて提示している。

・7:15「偽預言者(プセウドプロフェテース)」は、新約中で多くの用例があるわけではないが、終末的文脈の中で用いられる傾向にある(マタ 24:11,24、マコ 13:22、Ⅱペト 2:1、Ⅰヨハ 4:1、黙 16:13、19:20、20:10など)。おそらく「偽教師」(Ⅱペト 2:1)というニュアンスで言われているのだろう。

・29 節「権威(エクスーシア)」を持つという属性は、主イエスに関連して繰り返し問われること。「彼らの律法学者(グランマテース)」には、いわゆる「権威」が見られなかったという前提で描写されることから、主イエスに付与されて語られる「権威」とは、いわゆる専門家としての「権威」という意味とは異なることがわかる。もともと「エクスーシア」という語は、「合法的」を意味する語「エクセステイ」から派生しており、「正統性」や「権利」を有することを指す。つまり、「律法学者」には「律法と預言者」を正統に解釈する権利も合法性もないが、主イエスにはそれがある、つまり「律法と預言者」の源泉である「天の父」の「子」であり、「子」であるからこそ「天の父」の「御心」をそこから読み取る正統性や権利を有する者として語られた、ということ。

### 来週の誕生日 (7月11日～17日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

・21-11 番「感謝に満ちて」(=Ⅰ-2「いざやともに」)は、17 世紀ドイツの歌手で牧師のマルティン・リンカルトの作詞作曲。1630 年ごろ自らの子らのために食卓の感謝の歌として作ったが、著名な讃美歌作家クリューガーに見いだされて讃美歌集「歌による敬虔の訓練」(1647 年発行)に収録され有名になった。バッハやメンデルスゾーンが自由に用いている。

・21-484 番「主われを愛す(愛の主イエスは)」(=□124、□461)は、19 世紀米国の文筆家アナ・B・ワーナーが姉との共著書の中に挿入歌として創作し、後に、同時代の米国を代表する教会音楽家 W・ブラドベリーによって曲が付けられ讃美歌集「Golden Shower」(1862 年出版)に収録され、讃美歌として歌われるようになった。原歌詞は 7 節ある。日本では、1872 年に開催された滞日宣教師会議の際にジェームズ・バラが女性宣教師ジュリア・クロスビー(横浜・共立女学校の創立メンバーの一人)の日本語訳を示して歌われたのが最初の記録で、その後、多くの訳が作られた。「主われを愛す」の訳は 1903 年版

『讃美歌』から採用されてきたが、この訳では原歌詞の重要な句が訳出されていないことから、『讃美歌 21』出版に際して新訳が示され、『こどもさんびか改訂版』でも採用されている。

・21-430 番「とびらの外に」(=Ⅰ240「とどせる門を」)は、19 世紀英国の著名な讃美歌作家ウィリアム・W・ハウが黙示録 3:20 に基づいて作詞。『讃美歌 21』では全面的に改訳されている。

#### 21-11「感謝にみちて」

### Nun danket alle Gott

1. Nun danket alle Gott, / Mit Herzen, mund und händen, / Der große dinge thut / An uns und allen enden, / Der uns vom mütterleib / Und Kindesbeinen an / Unzählig viel zu gut, / Und noch jetzt und gethan.
2. Der ewig reiche Gott / Woll' uns bei unserm leben, / Ein immer fröhlich's herz / Und edlen Frieden geben, / Und uns in seiner gnad' / Erhalten fort und fort, / Und uns aus aller noth / Erlösen hier und dort.
3. Lob, ehr' und preis sei Gott / Dem Vater und dem Sohne, / Und dem, der beiden gleich / Im hohen himmelsthronen, / Dem dreieinigen Gott, / Als es im anfang war, / Und ist und bleiben wird / Jetzt und immerdar.

#### 21-484「主われを愛す(愛の主イエスは)」

### Jesus loves me, this I know

1. Jesus loves me! this I know, / for the Bible tells me so; / little one to him belong, / they are weak, but he is strong.
- Refrain:
- Yes, Jesus loves me, / yes, Jesus loves me, / yes, Jesus loves me, / the Bible tells me so.
2. Jesus loves me! he who died / heaven's gates to open wide; / he will wash away my sin, / let his little child come in.
- [Refrain]
3. Jesus loves me! he will stay / close beside me all the way; / when at last I come to die, / he will take me home on high.
- [Refrain]

#### J.N. クロスビーの日本語訳(1872 年)より1 節

エスワレヲ愛シマス、サウ聖書申シマス、彼レニ子供中、信スレバ属ス、ハイエス愛ス、ハイエス愛ス、ハイエス愛ス、サウ聖書申ス

#### 21-430「とびらの外に」

### O Jesus, Thou art standing

1. O Jesus, thou art standing / outside the fast-closed door, / in lowly patience waiting / to pass the threshold o'er: / shame on us, Christian brothers, / his name and sign who bear, / O shame, thrice shame upon us, / to keep him standing there!
2. O Jesus, thou art knocking; / and lo, that hand is scarred, / and thorns thy brow encircle, / and tears thy face have marred: / O love that passeth knowledge, / so patiently to wait! / O sin that hath no equal, / so fast to bar the gate!
3. O Jesus, thou art pleading / in accents meek and low, / "I died for you, my children, / and will ye treat me so?" / O Lord, with shame and sorrow / we open now the door; / dear Savior, enter, enter, / and leave us nevermore.